

不本意入学に悩む学生の面接過程に関する事例的研究

—— 大学を辞めて、就職したいという学生の面接過程の検討から ——

藤 土 圭 三

A Case Study for the Counseling of a Maladjusted Freshman

Keiso Fujito

問 題

今日、高等教育に期待して大学受験に努力する青年は多い。18才年齢時の学生の受験率も日本の経済発展と共に、増加の一途をたどっている。大学受験者の増加とともに、一部の有名大学においては、高い受験競争が示されるようになり、受験を上手に切り抜けた一部の学生は希望する大学に入学するが、他の多くの学生は不本意入学者 (reluctant freshman) となる。自由競争体制では、必然的に生起する現象であると言われるかもしれないが、当事者にとっては計り知れない心的負担を経験し、その負担を抱えたまま、不本意な大学に入学するので、その気持ちが晴れて、精神的健康を取りもどすまでには、相当の日時を必要とする。

不本意のまま、大学に入学はしたものの、専攻した学部学科に適應できず、再受験を希望したり、転学部を希望して来談する学生が多い。「不本意入学による退学・転学 (部) 相談」である。中には「この大学で修得した科目の単位は、来年度受験を考えている他大学でも認定してくれるのだろうか」という相談もある。

本事例は自然系学部に入學はしたものの、不本意入学であったため、学習意欲を失ない、登校しないで、下宿で蟄居しているという状況にあった。教養部学務係からの連絡で、不登校状態にあることが明かとなり、保護者が学生を出身地に連れ帰り、精神的に問題があるのではといぶかって精神保健センターで受診したところ、精神的問題は無いと言われ、学生相談室を紹介された。母親と本人が契約した時刻に来談した。定期的来談を促したが、定着するまでには何度かの電話連絡などかなりの日時を必要とした。

事 例 の 概 要

来談学生：A は現在、教養部在籍 3 年目の自然科学系学部生である。痩せ型で身長167 cm, 体重 49 kg, 20才の男子である。3 年前に入学し、1 年間は登校し、授業にも参加していたが、2 年生になってから登校を渋るようになり、下宿に蟄居するようになった。単位不足から、教養部学務係から保護者に連絡があり、保護者の知るところとなった。

家族：両親、妹、A の 4 人家族で、両親は自営業を営む。妹は地域の公立高校に通学中。両親は共に40才後半で、母親は父親とは別の商売をしているが、繁盛しているとのこと。

生活歴：乳幼児期は健康な発育を経過した。地域の小学校に入学、成績は常に上位であったが、いじめにあっていただのこと。中学時代にもいじめられるので、好きな先生の所に行って

いたとのこと。A が逃げてくると、先生は勉強を覚えてくれたとのこと。中学でも学習成績はよく、常に上位であった。A に対して＜何故、そんなにいじめられたの＞と聞くに、「自分が人とは変わっていたからだ」と言う。成績が上位だったので、私立進学中心高校を受験し、合格した。高校での3年間は寮で生活したとのこと。母親の言によると「反抗もなく、素直なよい子だった」とのこと。

単位取得状況：1年次は順調に単位を取得したが、2年次に外国語につまづき、「外国語つまづき」型の留年生となった。Aの所属する学部には進学基準があり、一定以上の単位を取得しないと専門学部への進学が出来ないという内規があり、残り5単位のために進学できない状況になった。

生活状況：下宿に蟄居して、TVを見たり、マンガを見たりして暮らしていた。クラブや部活動には興味がない。バイクに乗れるので、時たま一人でドライブするくらいで、友人はないと言う。しかし、マンションの経営者が食堂を経営していたので、Aはこの食堂で食事をとることもあって、食堂主の評判は「真面目そうな学生だ」とのこと。治療者との面接開始後、アルバイトをすすめたために、流通業で働くようになった。

面接経過

I期（#1—#14）——カウンセリング関係の形成期——

#1：3/6：母親と本人で来談する。小・中学校卒業後、Z市Y高校に合格した。Aに対して、＜なぜ、Z市に出たの＞と聞くに、「中学で、いじめにあったので」と言う。＜どんないじめに？＞と聞くと、「みんなと遊ばないし、無口だから」と言う。さらに、「Aは運動と遊びが嫌いなのだ」とも言う。「今も家のなかで、マンガばかり読んでいる」と言う。

母親が発言して、「この子（A）は、これまで一度も、親に反抗したことのない、よい子でした」と言う。「今回、このようなことが起きるまでは、何の悩みもなく商売に励んでいたのですけど、情ない」と言う。「町で国立大学に行っているのは、この子を含めて2～3人だと思う」と言う。「どうしてこんなことになったのでしょうか。見当もつきません」と言う。「それに私から生まれた子どもにこんな子どもが出来るとは何んとしても解せないです」と言う。治療者が＜もう！どうにもやりきれない心境なのですね＞と言うと、「そうです、いっそ、一緒に死んでしまいたいくらいです」と言う。

Aに話題を向けて＜どうなのか＞と聞くと、べつにと反抗的でもなく、普通の受け答えをする。治療者がAと2人で話をしたいと思い＜話に来ませんか＞と言うと、「そうします」と言う。

面接理解：初回面接に殆ど抵抗なく母親と共に来談する。本人は無口であり語らない。質問には最小限答えると言う感じである。治療関係を形成するための努力が必要と感じる。患者は小・中学校時代は適応過剰（？）な子供であった様子で、反抗期を知らないと言う。しかも出身地では国立大学に行くような出来の良い青年と見られている。Aはいじめに会うのは自分が無口で、皆と遊ばないからだ、自己責任を表明する。

#2：3/9：父親が電話してきて、息子が今日、そちらに帰ったと言う。昨晚、大学を続けるかどうかについて話しているうちに争いとなり、独立するように進めると、そうすると言って、帰ってしまったと言う。

#3：3/12：下宿に電話して、午後5時に相談に来るようにすすめ、約束する。

#4: 3/12: 父より電話があり、その後の様子をたずねる。今日の午後5時から面接すると伝える。

#5: 3/12: A が定刻通りに来談する。退学したいと言う。しかし、退学についての手続きを知らないで、情報提供をする。Y 高校に入学以来、ずっと寮で暮らしていた。1, 2 年は一部屋、2 名だが、3 年は1 名となるという。全国規模の模擬試験では、30 番の学生もいたので、有名大学にも行く者もいると言う。これからどうしていいか、見当がつかないのが本音らしい。

＜今、どうこうしないで、ここに暫く来て、相談して決めてはどうか＞と提案すると、「そうします」と言う。＜アルバイトをする気はないか＞と聞くと、いぶかる。＜下宿で何もしないでいるよりは、社会との関係を持って欲しい＞と言う。面接修了の時刻がきたので、治療者から＜もう少し話したい＞という気持があったので、＜明日も来談するよう＞にと勧めると、「そうします」と言う。

＜面接理解＞

何かちぐはぐではあるが、とにかく来ると言う。あまり多くを語らない。無口である。細面の顔、痩せている。鞆だけはしっかりと持って来るところが何かを訴えていると言う感じである。話がはずまないで、沈黙が多い。関係形成に時間がかかる。

#6: 3/13: 父親から電話が来る。息子が来ているかと言う。昨日、来談したと伝える。

#7: 3/13: 母親から電話: 息子に送金してよいかと言うので、金は送ってやってほしいと言う。

#8: 3/13: A が定刻通りに来談する。父は5 人兄弟、町で自由業をやっている。母は父の隣の店で別の商売をして、父以上によく稼いでいるとのこと。A の郷里は200 軒ばかりの集落で、港もある。I 市と K 市とにフェリーがでている。アルバイトで、流通業に勤めるようにしたと言う。17 時から21 時までの4 時間を働くことにすると言う。定期的なアルバイトをするのは久しぶりと言う。初級公務員の試験を受けると言う。10 月が受験だと言うので、＜それに向けて頑張っては＞と言う。「目的に向かって、人生を開く」と言うので、＜その方法で行ける人もいるし、アメーバーのようにあいてるところに手を延ばして、という生き方の人もある＞と言うと「僕の中学時代だ」と言う。＜どういうこと＞と聞くに、「いじめられるので、先生に相談に行ったら、英語を教えてもらえて、進学することだ出来た」と言う。「これはアメーバーの生き方だ」と言う。＜面白い生き方を経験しているのですね＞というと、うなずく。＜今回もこの方法でやりますか＞と聞くに、「そうですね」と言う。

面接理解: 定刻に来談し、家族のことを初めて語る。父親は自由業で、自分にかかる期待は大きいのだと言う。A は両親の自由業を否定的に認識し、あまり語りたがらない。家にも帰りたくないと言う。A は流通業でアルバイトをして、初級公務員を受験し、自立したいと言う。A のこのような行動の背景には、現在の大学が不本意入学であり、不本意から来る不定愁訴を脱却するためには、大学を辞めて社会人となることだと決めている感じである。

#9: 3/17: 定刻通りに来談する。来談意欲があるものと推察される。アルバイト先は時給700 円とのこと。休み期間中は、13 時から21 時まで、働くことにしたと言う。＜教養部学務で単位の取得状況を聞きに行くか＞というと、行きたくないと、不快の感情を示す。単位の話をすると、拒否反応を示す。大学への拒否反応は今後の面接で、じっくりと取り組むことになり

そうだ。

面接理解：面接するようになって、安定して来た感じであるが、大学を辞めるという意志には変化が見られない。A は辞めることを決めているのに、面接には定期的に契約通りに来談する。A は大学を辞めると言いながらも、踏ん切りがつかないのだろうか。地域で注目されている青年が大学を辞めるということは、これまでに築いていた地位の変革であり、決断までの逡巡があるのであろうか。学校にも行かないで、家に居るばかりの青春を思うと、しんどい生活を感じるが、それでよいのだろうか。中学校のころ、いじめにあって、先生に訴えに行って、英語を習うようになり、さらに友達がなくなる。この選択が彼の今日を作っているような感じがする。

#10：3/23：定刻通りに来談する。アルバイトは続けているとのこと。一部の人とはうまく行くのに一部の人とはうまく行かないと言う。＜どんなことですか＞と対応する。「大学を辞めて、別の学校に行きたい」と言う。航空大学校の話が出たので＜パイロットか＞というと、「通信士とか、整備士だ」と言う。＜わき役の仕事を選ぶのですね＞と言うと、「そうだ」と言う。下宿も変わって、安い家賃の家に入りたいと言う。＜いくらくらい安くなるのか＞と聞くと「月2,000円だ」と言う。今は一カ月、70,000円で生活していると言う。アルバイト先で高校中退の男が自分の世間知らずを笑うとのこと。その男は旅館の女を好きになって、つき合っているが、この女性が勉強しないので、高校に行けないのだと言う。＜そんなに勉強できないのか＞と聞くと、「そうらしい」と言う。

面接理解：ゆっくりと、とぎれ、とぎれに話す。堅実な話である。しかも裏方の仕事に関心を示す。いかにも律儀な感じのする青年。それでいて大学には来ないで、思い込みが強い。流通業で働くことが定着している。働く意欲があり、生活は安定している感じである。

#11：3/26：定刻通り来談する。アルバイト先の友人から女友達はないのかと言われて、そうだといったら軽蔑されたと言う。紹介しようかとも言われた。新聞配達の誘いがあったが断わったとのこと。一部200円で受けないかと言われた。以前は、100軒ほど配ったことがあると言う。自分は人間関係が下手だと言う。中学の時にはいじめにあって、人づきあいが悪いし、高校でも勉強に一生懸命で、友達を作らなかったのも、人間関係が下手のままだと言う。高校の時、寮にいた同室者が、『お前は鬱病だ』といったことがあると言う。確かに自分は人づきあいの悪い、ひとりぼっちの人だと言う。3月25日にはじめて、サラリーをもらった。20,000円ほどあったと言う。親からの仕送りと稼ぎで、生活が成り立っていると言う。

面接理解：人間関係が下手と自己分析をする。自分は小さい時から何時も人間関係から逃げて来たと言う。中学ころから、今日まで孤独で過して、何時も逃げていると言う。友人関係を中心とする人間関係の経験が少なく、中学・高校と一人で生活し、学習に傾倒することで、時間を費やしていた感じである。

#12：4/3：時刻通りに来談する。話は弾まない。B（流通業社員）が色々世間のことを教えると言う。アルバイト仲間のC（女性）が働かないのでシャクにさわれると言う。公衆風呂がなくなったので困るという。小学校のときの調査で、異常だといわれたことがあるとのこと。

面接理解：時間通りに来談する。時間に正しい所は予想外である。幼い頃から人間関係が困難な様子、小学校のころから友達とのつき合いが悪く、人間関係にはいつも困惑している。Aの性格に偏りがあるのかもしれない。話はとぎれがちで、脈絡のない話が続く。学習は出来た

が、社会化が弱いと言う学習成績優秀者の特性が示される。アルバイト先でも他のアルバイトの働きぶりが気になるらしい。A はアルバイト先でもよく働くので、経営者からは受けがよく、正社員にならないかという話もあるらしい。

#13: 4/10: 12:30に約束したが来談しないので、電話すると部屋にいる。寝ていたと言う。時間の都合で、4月13日の9:30に来談するように約束する。余り乗り気ではないらしい。治療者が<来なさい>といえは来る感じ。

#14: 4/12: 親から電話がくる。手紙が来ないので、電話したら退学したいと言う。4月9日に生活費を20万円振り込んだと言う。アルバイトは続けていると伝えたと言う。

Ⅱ期（#15—#28）—— 一時的安定から変化へ——

#15: 4/13: 定刻通りに来談する。新学期授業のためのオリエンテーションに出ていない。勤めるか、退学するかと悩む。とにかく単位の取得状況を見て、ということに話をつけて、教養部学務係りに単位の履修状況を聞きに行く。20単位は取っている。あと10単位程度取れば3年生になれるとのこと。5単位でも可能とのこと、A は困惑する。月曜日まで考えると言う。教養部の学務係りを訪ねたとき、事務官に注意されて、ショックを受けてしょげている。アルバイト先に大学を辞めると言う、本雇いになれると言われたと言う。最近、中学を出たばかりの人が採用されているとのこと。<貴方はどんな気持ちか>と聞くに、はっきりしないと言う。

面接理解: 事務官の注意がきっかけで、抑うつ的である。はっきりしない、どうするかと言うと、わからんと言う。続けるか、辞めるかの選択に迷っている。岐路にたっている。意識的には大学を辞めようと決心しながら、いざ辞めるかと言う段階になると気持の整理ができない状況であろうか。

#16: 4/16: 定刻通り来談する。どうしようかといって悩む。辞めるか、続けるか、退学方法としては、除籍よりも自主退学にされた方がよいと伝える。

対人関係が下手だと言う。どんなことかと聞くと、他人と趣味が合わないので話づらいと言う。話さずに、なんとなく一緒にいると、人の目が気になると言う。<焦らないで、ゆっくりやりましょう>と言うと、「そうします」と言う。半年間は頑張ってみるという感じである。家にじっとしていてもいいのかと聞くので、<家の中にいるより、働いている方が楽かもしれないね>と言う。治療者が気持ちの転換を図るために、<陶芸家のような一人で仕事のできる仕事についてはどうか>という、何故かと聞き返すので、<人間関係をあまり必要としないから>と言うと、「手先が器用でないからダメだ」と言う。見事に否定される。

面接理解: 不安で、イライラしている。悩みが強い、進路を決めかねている。訴えがあるので、関係はよい。心理的相互関係が深くなる感じ。

#17: 4/18: 定刻通りに来談する。今日はアルバイトの給料日だからうれしいと言う。12万円位はもらえそうだと言う。大学を辞めることについて、自分は除籍でもよいと言う。治療者が<除籍よりは退学の方が良い>と言う。何故かとたずねるので、<長い目でみたら、除籍は不利だ>と説明する。

面接理解: 働くことには関心があるが、勉強には関心がない。間違っ大学に来たと言う。少しずつ決心がついてゆく感じである。

#18: 4/19: 母親より電話がある。A から電話あり、『辞めたい』と言う。カウンセラーと相談して、カウンセラーの言う通りにして欲しいと言うと、A もそうするといったとの由。授

業料は入金したとのこと。

#19：4/21：定刻通りに来談する。殆どしゃべらない。無口のままではいる。聴講届を出さなかった。父は英語の本ばかり見ていると言う。何のための発言かを確かめない内に次の話に移る。大学を辞めたら、流通業（アルバイト先）に勤めるようになると言う。9月に辞めることにすると言う。僕は小さい時、書道の時間に字を書かないで、線ばかり引いていたと言う。体操でも繰り返し同じことをしていたと言う。私は変わっているかと言うので、そんなには思えないと言うと“そうか”と言う。ポツリ、ポツリと話す。この間、給料をくれると思っていたらくれないので、ご飯を食べずにいたら、口内に吹出物がでたと言う。＜送金していると親がいていたが＞と言うと、「知っている」と言う。＜気張るのか＞と言うと、「そうだ」と言う。

面接理解：うつ状態でほとんどしゃべらない。僕はおかしいかと言う。そのような症状はないと言うと、そうかと言う。暗い、将来は未定である。異常ではないかと気にしている。焦点化しようとすると言をはぐらかす。しかし、何か展開があるのかも知れない。

#20：4/27：定刻通りに来談する。この間、給料をもらったと言う。12万円ばかりあったとのこと。28日間も働いていたと言う。＜すごいね＞と言うと、「そうでもない」と言う。父は自営業ばちばちだが、母の商売は当たったと言う。小学校の時にいじめにあったのが、今でも忘れられないので、田舎には帰りたくないと言う。中学校の時も、毎日のように、嫌な感じだったと言う。＜何故＞と聞くに、「いじめられていたからだ」と言う。Y高校には同じ町から3名も出てきた。Y高校卒業後は、他の二人は私立大学へ、自分はこの大学へと言う。

面接理解：やはりいじめられたことが心に残り、こころ深く生きているようだ。しかし、いじめの話をする時には、いじめと同時に成績の良かったことも心にあり、両方の感情（快と不快）で会話が続く。

#21：5/9：定刻通りに来談する、殆ど話さない。連休中も一日も休まずに働いたとのこと。17：00から21：00まで働く。他の社員は休んだが、自分は休まないと言う。話が途切れる、静寂。初級公務員に受験すると言う。＜どんな仕事か＞と聞くに「配達員」と言う。10月に試験があると言う。自動車の免許も取りたいと言う。やってみてはと勤める。

面接理解：新しい芽がでる。動きがみえる。期待したい。大学には来たくないが、研究室（面接室）には来ると言う。働くことに、力がこもってきたように感じる。配達業務につくと言う。方向が見えてくる。

#22：5/12：父が電話してきて、Aが相談に来ているかと質問する。来っていると伝える。金は送っているのに使わないので心配だと言う。授業料を納めないのだろうかと言うので、貴方（父）から聞いてほしいと言う。治療者とAとの間では話がついているのだがと言う。Aの所に電話すると喧嘩になるし、気まずい空気が流れるし、残念と言う。治療者からAの最近の状況を父に伝える。アルバイト先で17：00から21：00まで働いて、昼は家にいる。初級公務員を受けるために勉強をしていると言う。

#23：5/18：定刻通りに来談する。2日前に約束していたが、来なかったが、来談を再契約したので、この間来なかった訳を聞いたところ、寝過ごしてしまったのですと言う。アルバイトは定着し、安定する。この間、友人（アルバイト先の社員）から、オート・レースに行こうと誘われた。賭をするのでイヤで断ったと言う。初級公務員採用試験の準備をしているとのこと。頭が悪いから、なかなか覚えられないと言う。頭が悪いと言う話をしているうちに、性格

検査を受けたいということになり、YG 性格検査用紙を渡し、記入して来るようにすすめる。今日は雨で、単車で来るのがきつかったと言う。ヘルメットの前が見えなくなると言う。サーキットに行きたいと言う。〈行って見たら〉と言うと、「そうですね」とは言うものの、あまり興味は示さない。

#24：5/25：定刻通りに来談する。頭がわるい、おぼえられないと言う。どうしたらよいかと言う。性格検査の結果が分かっていたので、希望が持てるように説明をする。

面接理解：少しずつ変化している感じ。もの覚えが悪いとか、体がだるいと言うのは何か変化を求めるきっかけではないだろうか。YG 性格検査の結果、E 系タイプである。

#25：5/28：定刻通りに来談する。昨夜家に電話し父と話した。これまで、母親が出なかったののでどうしたのかと思っていたら、その訳が分かったと言う。母親はそばに居ても電話に出なかったようだという。何故かと聞くと、話すと喧嘩になるからだと言う。食事をとらないためか、歩くことがきついと言う。どんなことがあったのかと聞くに、昨夜、階段が降りられなかったと言う。昨夜、3 時ころ町に走りこいたら、蛍が飛んでいた。大学にはまだ明りがついていて。理学部・農学部の方だったと言う。教養部学務係りから呼び出しが来ていた。叱られるから行きたくないと言う。何故、呼び出すのかと聞くに、聴講届を出していないからだろうと言う。治療者が〈学務に行ってみなさい〉と言う。嫌だということで、嫌だろうが、学務に行っておいた方がよいと勧める。

面接理解：話題は暗いものばかりだが、何か前向きである。体の不調を訴えながらも働くと言うし、親も電話で、自律するように要請しているとのこと。今後どうなるか分からないが、何かが変わったようだ。何がどのようになるのか、期待できる。

#26：6/4：定刻通りに来談する。前面接（5/28）で、体の具合が悪いといったので、治療者が、医師に診てもらいに行くようにといったら、近くの公立病院内科医師に受診したと言う。肝臓が悪いと言われ、薬をもらっている。尿と血液の検査を受け、その結果から、肝臓が悪いということになった。同時に心療内科（精神科）も受診するようにと勧められたと言う。受診の結果は、「問題なし」であった。

5 月26～27日頃から右手がマヒしたと言う。内科の先生に訴えたが、あまり問題にしてくれない。訴えても取り合わないと言う。

家から電話があった。母が、アルバイト先に電話してきた。色々居場所を捜したらしい。

面接理解：マヒ感覚が残っていると言う。心理的にどういう意味があるのか、検討したい。マヒ感覚に対して過剰に反応し、障害者になるのではないかと心配している。医者との相談を勧める。関係の中での転移性症状かもしれない。症状があるので、話題は豊かである。

#27：6/6：時刻通りに来談する。右手のマヒが軽快してきたと言って喜んでいる。〈医師に行ったのか〉と言うに、「イヤ」と言う。〈自然に良くなったのか〉と言うと、「そうだ」と言う。「B（アルバイト先の友人）が乗用車を買った」と言う。〈そう、いくら〉と言うに、「130万円だった」とのこと。母親が100万円出して、本人が30万円出したのだと言う。〈貴方も欲しいのか〉と聞くに、無言。父がお好み焼きを作るとき、何時も自分のことを思っ焼いていると言う（父が電話でこんなことをいったらしい）。父はおかしいかと言うので、〈どのようにおかしいのか〉と聞くに、へんなのだと言う。

治療者が「父が貴方に対して思いが深いのではないか」と言うと、びっくりして、予想外の答えと言う感じを示す。どうしてかと言うので、「貴方も父を呼ぶとき父ちゃん」と言うので、「チャン呼びをするのは、そうなのかと思っている」と言うと、なるほどと言う感じを示す。でも、自分としては、父から、しっかり離れたい気持ちだけどと言う。「意識しているところとは別なのかも知れない」と言う。「昼前に起きて、書き取りの勉強をして、昼と朝と一緒に食べて、ここにきて、昼からも勉強して、夜はアルバイトに行く」と言う。「これが日常生活だ」と言う。「これで良いのだろうか」と言うので、「どこが」と言うと、家にばかりいるがと言うので、それなら図書館にでも行ってはと言うと、無言。話をかえて、心理の図書が沢山あるがと言うので、そうだとすると、貴方は図書係かと言う。イヤこれは私ののだというと、(回りを見回しながら、これ全部かと言う。そうだと答えると、文化人類学の先生は、本の中に顔があったと言う。＜どういうことか＞と聞くに、「イヤ……」と言葉を濁す。何か感じるところがあるのだろうが明確に表明しない。

面接理解：色々と多彩な話題が語られる。生活のリズムもできて、能動的に生活している感じがする。Aと両親とは色々と言いながら、離れきれない感じである。治療者の研究室に何回も相談に来ているのに、今日はじめて回りの書籍に注目し、図書係りかと聞いてくる。回りの環境に注目することは、内的安定があつてのことであろう。

#28：6/8：父親より電話、Aは治療者のところに来談しているかと言う。今、どのような状況かと聞くので、状況を伝える。

#29：6/9：定刻通りに来談する。Bが社員研修に行くと言う。社員が分かれて社員旅行に行く、Aに後詰めに来てほしい」と言われていると言う。仕事の話となり、水とり液を入れいようにと進める。「何故か」と聞くに、よくわからんが、とにかく入れると良いらしいと言う。「それにしても水をいれて、水とりになるとは不思議だ」と伝え、そうですねと言って笑い出す。「試験準備をしていますか」と聞くに、「まあまあです」と言う。

面接理解：元気がよい。この間の症状はどうしたのかと言いたいくらいである。安定している感じである。この安定をどうやって打破り、発展に結ぶか問題である。

#30：6/18：定刻通りに来談する。元気よい、安定している。「この間、古本屋で、数学の本を3冊を300円で買った」と言う。社員が旅行にでるので、その代役として、勤務時間の延長を引き受けている。今日もこれから(午後1時)行くことになっていると言う。働くことに意味を見つけている感じである。「やっていますね」と言うと、「そうです」と言う。

面接理解：今日は顔色もよく、元気がよい。安定している。落ち着いている。こう安定してしまうと、どうすれば良いのかと言う気持ちになる。安定していない方が何かやりがいがある。不安定の中にこそ、変化への兆しがあると言うことなのか、贅沢な話。

#31：7/3：母親より電話がくる。Aから電話があつたとのこと。保健証を送ってきた。手紙の中に、大学を辞めて勤めに出ると書いてあつたので、Aに電話して慰留したところ、険しい関係になったと言う。どうしようかと言うことであつた。大学を辞めることについて、Aと話して来て、この様な状況になったのだが、どうしようかと言う。不審でしたら、一度話しに来てほしいと伝える。

Ⅲ期（#31—#35）——何か変化の兆しが！——

#32：7/4：定刻通りに来談する。入室した時から、緊張している。無口で、何も話さない。

何かあったのかと聞くに、「家から電話があり、こちらで就職するようにいったら、けわしい関係となった」と言う。もう公務員試験は受けない、どこかの会社で働きたいと言う。もうここに来るのも止めたいと言う。

面接理解：家から電話があり、緊張が生まれ、来談もしないと言いだした。次の来談契約も拒否された。しばらく待つことにする。

それにしても、ちょっとした行き違いから、治療者とAとの関係にまで大きく影響した。進路指導の先生や担任教師の薦めで入学はしたものの、人生の選択を間違えてしまったか。

#33：7/6：母親より電話が来る。母親は、これと言って、強いことは言っていない。心配そうな声は出したかも知れないと言う。また、子どもが『病院に行く（7/12）から、保健証を送れ』と言う。

治療者から一度、来てやって欲しいと伝える。A が病院に行くなら、一度一緒に行ってやってほしいと伝える。母が来ることになる。

#34：7/11：母親来談：母親が言うには、この間電話があり、保健証が欲しいといった。その時、働いている、学校は辞めたい、働きたい、そちらには帰らないで、こちらで働きたい、流通業で働きたいと言ったとのこと。親としては、そうしたいのならそうしてもよい、そうすることに抵抗しないと言う。

とはいえ、大学を辞めると言うのだから、これは親としてもすっきりしない感情があり、それが電話でA に伝わったのか、その後は緊張した関係となる。

昨夜、A と久しぶりに話をし、A と通じた感じがすると言う。来て良かったと思う。うれしかった。親としては、自分のやりたいようにやって欲しい。別に大学に行かねばならないと言う気持ちはない。父は防衛大学に行かせたかったのだから、A はこの大学に行きたいと言って、ここに来たのだが、親としては、強く大学進学を求めているものではない。私立薬科大学2校と、別の私立大学1校も受験したのだが不合格となっているとのこと。

病院での受診の結果、肝臓が少し弱っている。しばらく通院するようにと薦められている。精神には問題ないと言われたとのこと（心療内科に受診）。ストレスがあるのでしょうかと言われたとのこと。

#35：2年後のある日：A から、近くに来たのであいたい旨の電話がある。暫くしてA が来室する。A が語る。その後の2年間は、大学を辞めて流通関係の会社に正社員として、採用され、元気に働いているとのこと。大学を辞めようか、続けようかと悩んでいた時にはお世話になりましたと言う。治療者は安堵した。2年前、ちょっとした親との行き違いから感情的になり、治療者との面接も断ったが、踏ん切りがついて、社長と面接し社員となり、現在は、ブロック担当の責任者として働いているとのことであった。

考 察

3月に面接を始めて、7月までに35回（電話を含めて）の面接を続けてきた。A は、面接動機が高いようには見えなかったが、何とか定期面接に持ち込むことができるようになり安定した。治療者の治療目標としては、できればA の所属している学部専門コースに進んで欲しいと思っていたが、これはかなえられなかった。

34回に渡る面接は、山場のない、平板な面接過程であった。しかし、よく検討すると、徐々

に安定し、変化している感じである。本事例を整理して感じることは、A の訴えるテーマは「大学を辞めて、働きたい」であるが、このテーマは始めから終わりまで継続した。本事例では辞めたいというにもかかわらず、せっかく大学に入っているのに……という大人の勝手な願いから始まったカウンセリング活動で、治療者も、始めはそう言う感じがあった。面接過程を通して、気持ちに変化が起きるかもしれないと言う期待があったのも事実である。

34回の面接で理解しえた A の特徴は、痩せている、無口である、働く意欲は高い、親との関係が深い、親の言うことに反発しながら引きずられている、「チャン呼び」が気になる、親もよく電話してくる、「捨てよう→捨てきれない」の葛藤を両者から感じる、公務員になりたいと言う気持ちは、安定のためであろうか、初めから公務員のみと決めている気持ちは興味深い、異性への関心が少ない、免許をもっていない、などである。

生活歴では、小学校以来、学習成績は上位にあったらしい。A は成績は良くないと言う。しかし、彼の学校での行動には特異性があり、何かあるとすぐに先生のもとに庇護をもとめて行っていたらしい。結果、成績がよく、高校は私立高校に進学し、寮生活をする。彼は2～3の私立大学と防衛大学、国立大学を受験したが、防衛大学と現在の大学以外は不合格となる。

大学を卒業できたら、出身県に帰って、中学校か高校の教師になってほしいというのが親の夢である。親の夢がかなえられるかどうか。そのために、この面接がどきように機能するか、これが問題である。

症例検討会での検討結果

本症例は34回目の面接修了後、地域の専門家による症例検討会（心理臨床家と精神科医師で構成される。毎回、15名程度の参加者がある）に提出し、症例への対応について検討した。結果、次のような問題が討議された。

(1) 精神医学者の参加があったので、臨床心理専攻の参加者の中から精神医学的見解について質問があった。精神医学者の意見として、この対応の仕方が続けられていけば、変化への対応にも手拔かりはないし、現時点で精神医学的対応（主として薬物投与）は必要ないように思うとの見解が表明された。特に A が地域の精神保健センターで受診しているし、さらに公的病院の心療内科にも受診しているので、精神医学的判断には手拔かりはないものと考えとの見解であった。

(2) 治療者の治療目標は A を大学へ復帰させたいのか、就職させたいのかの質問があった。治療者の見解としては、A が大学に復帰できればそれでもよいし、大学を辞めて就職してもよいとの考えを表明した。A が人生の選択点において、何れの方角を選択するかは A 自身が決定することであると表明した。

(3) A の親からの分離独立というテーマはどうかとの質問に対して、治療者の見解として、A と親の関係は十分に独立が成し遂げられているとは考えていない。密接な関係（固着かも知れない）のままであると考える。

(4) 治療者が A への援助の一つとして、アルバイトを要請しているのはどうかとの質問に対し、治療者の見解は A がアルバイトをしてくれるならば、適応の難しさを体験するので、治療関係の中で、援助への糸口を掴みやすい状況が得られるとする。

(5) アルバイト先の所長が、中学時代の教師機能をはたし、社員が A の理解者として機能し、アルバイト先への適応ができているとみてよいのではないかとの発言に対し、治療者はどのような機能を果しているのかの質問が出された。治療者の機能は治療機能とみていたが、参

加者の中には、治療者は父親機能ではないかという見解を持つものもいた。

(6) 本事例の場合、保護者がことあるごとに電話をして来ているが、どういう意味なのかとの質問に対し、治療者は発言者ほどに敏感には感じていないことに気づいた。発言者は治療者が保護者に近すぎるのではないかという気持ちがあったらしい。

受験制度が整えられ、合理化されるにつれて、受験生は希望する大学に入学し、希望に満ちた学生生活が期待されると思われるが、必ずしも期待通りに進まない。制度が合理化されるにつれて、受験生（行動）に内在する夢や期待感が少なくなり、合理化が進展するにつれて、その結果として不本意入学者の排出を見る。受験制度は複雑怪奇な制度と言わざるを得ない。本事例の学生は、大学入試センター試験を受けて、その結果を見ながら受験希望大学を選択し、二次試験をパスして入学したのだから、何も不平はないだろうと考えられるが、事実はそうではなく、入学後不本意入学を感じ、深い悩みを感じる学生となった。制度がどのように合理化されようとも、すべての受験生の心情を満たすものとはなりえないことを示す事例ではなかろうか。自我再構成期にある青年が、人生過程の選択点において何をどのように選択するかは彼ら自身にとっては大きな課題である。健康と発達に恵まれた一人の青年が幼少期から高校までの教育過程において、多くの指導者の働きかけと援助により、一つの選択をし、自然科学系の学問を選択した。この選択は社会的側面からみると特異的でもなく自然で合理的であるように見えるが、本人に取っては不都合なものであった。

学習動機が低減し、下宿に蟄居し、不登校状態が長く続いた。彼は面接当初から大学を辞めて、社会人として働くことで、人生の再出発をしようと感じていたが、現実に行動化しようとする時、親の意見や社会的常識を感じ、ためらっていた。ためらいと逡巡を解決するためのカウンセリング関係であったように考える。

Aは「いわゆる出来の良い子」で、親や教師の指導をよく聞き入れて、よく守り、その通りに行動したため、学校での成績は向上し、大学入試センター試験等の成績も参考にされて、2-3の大学を受験したが、これらの受験を希望する大学の選択においても本人の希望や意見によると言うよりも、周囲からの指導意見に振り回された感じである。換言すれば、自分の意見は表明しないで、周囲の意見に従って大学を選択したところに問題があり、意見に従って入学はしてみたものの肌合いが悪く、登校意欲を失ってしまったと推察される。登校意欲を失ったAは社会性が豊かであるとも言えず、結果的に下宿に蟄居すると言う方法で、その日暮らしを続けてきた。入学して三年間、指導者側からの指摘も援助もなく、放置されたままであったが、教務係りからの保護者に連絡したことから、指導者が関与する状況となった。3月から7月までの約5月間の間の面接指導であったが、初回面接からのキーワードは「大学を辞めて就職したい」と言うことであった。Aは面接過程の中で、自己選択と自己決定を練習し（話し合い）、現実関係の中で実施し、上手く出来れば続けて実行し、抵抗や反撃があれば、問題点を調整することの繰り返しであった。本事例の面接過程は青年の青年のための逡巡そのものであったと言えよう。

秋山幹男教授（広島文教女子大学文学部）の本事例研究に対するコメント

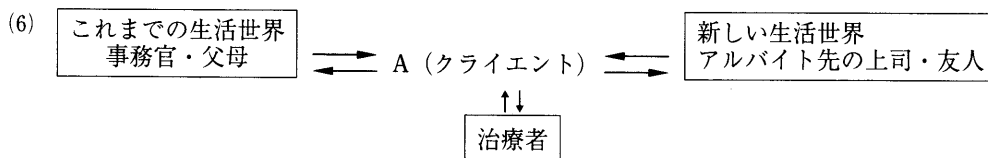
秋山幹男教授は発達心理学者で、親子の類似性に関する研究を続けられている。著者より願って、本事例とその面接過程に対するコメントを頂いた。

(0) キーワード：「新しい人生への船出を見守る“内なる他者”の形成」

(1) 親・地域の注目というこれまで築いてきたAの、A自身による地位の変革——自己によ

る決断までの逡巡がこの面接の意義である——

- (2) 価値の多様化を標榜している日本社会にありながらの教育の一元化の現状の中で、急に自己による将来の開拓（それも不本意な）を迫られた青年の苦しみ。
- (3) この面接過程には「飛躍」というドラマチック性がないだけに、現代の多くの学生に通用するのではあるまいか。一步一步足元を固めながらの人生移行プロセスには新しいタイプの大人の助言、見守る人が必要なのだ。
- (4) 足踏みをすることのなかったこれまでの生活（受験準備生活）世界に対する蟄居の意味は大きいものがあるが、このままでは底無し沼的世界があるのみである。
- (5) このような状況下のAに対して、大人達がどのように援助の手をさしのべるかが大事なポイントである。



（これまでの生活世界とこれからの新しい生活世界との橋渡しの役）

- (7) 初めての蟄居の中で、自己決断を迫られた——事務官が単位不足を親にも連絡——
- (8) ひきこもり→「面接」→決断の過程：自分の未来をシュミレーションしてみるという体験の場となった（ウオーミング・アップの時間）。
- (9) 「情」と「理」のバランスの取り方が、前向きの「意欲」へとAを駆り立ててゆく——治療者との関係の中で——
- (10) 両親からの送金には手を付けず、自分の力で稼ごうとする努力——父よりも母の方が仕事で繁盛していると言うAの思いとその関係は？——治療者の言葉で父の存在（Aを思う心）に気付いたA、これは父との和解につながる。母との対決（申し訳ないと思う気持ちの原点は心の中の臍帯である）。
- (11) Aを見守る新しいタイプの大人である治療者と、これまでの大人（親・教師）のイメージを持つ上司の存在に大きな意味をみる——Aにとって大切な「内なる他者」の受け入れの成立：新しい縦の人間関係の受け入れ——
- (12) いじめから逃げて、先生に英語を教えてもらった（思い出の中にある“自分イメージ”との対決）——逃げと孤独の人間関係を補償する。
- (13) 自己責任を表明するという形で自己認知の出来たAは、アルバイト先の友人に自己開示ができた。これは初めての仲間関係（新しい横の人間関係）の体験となった。
- (14) 一つの諦めと新しい決断の間に横たわる溝——本当の意味での自己決断をすることになった面接は、彼に取っての大切な時間であった。
- (15) 「今、ここでの人間関係の再確認と再調整のプロセス——過去を現在に生かし、未来を踏まえて、現在を生きることの大切さ。
- (16) 治療者との出会いは、これまでAが身につけていた大人のイメージを変え、違った角度より回りを、特に社会を、そして自分を見つめ直すことに結びついていった。
- (17) 2年後の突然の訪問の意味：Aにとっては意味のあった治療者との出会いだっただけ。それが治療者の喜びとなりこの論文作成の動機付けとなっている。
- (18) やはり Erikson, E. H. の言う「自我同一性」のテーマであろう。

①社会の中での自己の存在感を確かめる手段としては、蟄居は役に立たない。

しかし A にとっては大切なモラトリアムだったのかも知れない。

②事務官の対応の意味：ショックが治療者との出会いを作った——葛藤状況を産む。「どうしよう、でももう逃げられない。」——岐路にたった時の救いの手として治療者との出会いがあった——

③来談動機が高く自立へと導いた——岐路の選択を焦らず A にまかせた——A は人生の曲がり角で、助っ人の大人（治療者）に出会えた。

治療者との関係の中で、両親と面と向き合って（対決）、岐路の選択を曲がりなりにも自分一人で決断した。

④大人に何とか調子を合わせられるという A の築いて来たこれまでの人生は、真面目に仕事（勉強も含めて）に打ち込める誠実さに結びついていった。

⑤残された課題は、同世代との横の人間関係を自分なりに学びとることである。

(19) 治療過程へのコメント

①家に居るばかりの青春はわき役の仕事を選びたいということだったのか。

②事務官からの連絡がショックとなり、強い葛藤を産む。しかし、治療者との出会いを産むチャンスとなる。治療では、焦らない→ホットする→確かめ。

③新しい芽・動きを見る。これまで身につけてきた生き方を改めて過去からの脱出のために、親からの送金には手をつけずに自立しようとし、大学から脱却するために初級公務員の試験を受ける。

④異常感が正常化の確認を求めて、バランス感覚を身につけようとする。これが心理的距離の適正化へと進展する。「内なる他者としての父の内在化の始まり」を感じる。

⑤自分の身の回りしか見えなかった A が、治療者の世界にも注目できる心の余裕を示す——能動的な生き方が可能となる（社会に巣立つための大切な条件の一つである）。

⑥両親との対決の問題を残しつつも A は安定の方向にある。

⑦公務員試験を受けることとアルバイトの関係では、後者の方の状況変化が大きく A を引きつけていく。

⑧避けてきた母子対決が始まる（#31-#35）——言葉の背後にある母親の本心を探り出そうとする考えさえも浮かばないくらい A と母親との絆は強かった。

⑨直接対決：初めて心を開いての話し合いが出来る。母親との和解が出来る。

⑩荒海かも知れない社会への船出：大切な大人に見守られながらの……。

参 考 文 献

- Erikson, E. H. 1968 Identity: Youth and crisis. New York: Norton. 岩瀬備理（訳）1973 アイデンティティ 金沢文庫
- 林 潔 1987 職業的自己概念による学生の職業に対する態度の検討 学生相談研究 9-1 pp 1-8
- 河合隼雄 1992 臨床心理学 3 心理療法 創元社
- 中西信男・麻生 誠・友田泰正編 1980 就職——大学生の就職行動——有斐閣
- 中山 巖 1995 教育相談の心理ハンドブック 北大路書房
- 西平直喜 1990 成人になること シリーズ人間の発達 4 東京大学出版会
- 西村良二 1993 心理面接のすすめ方——精神力動的的心理療法入門—— ナカニシヤ
- 鐘幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社

—平成7年9月30日 受理—